対訳西鶴全集一

好色一代男

訳注
麻生磯次
冨士昭雄

明治書院

麻生磯次<あそう・いそじ>

〔略歴〕 明治29年千葉県に生まれる。
大正9年東京大学文学部国文学科卒業。
学習院院長をへて現在日本学士院会員。
文学博士。

冨士昭雄<ふじ・あきお>

〔略歴〕 昭和6年京城に生まれる。
昭和30年東京大学文学部国文学科卒業。
現在，駒沢大学文学部教授・東京女子大学講師。

対訳西鶴全集 一
好色一代男
二八〇〇円

昭和四十九年四月二十日印刷
昭和四十九年四月二十五日発行

著者 麻生磯次
著者 冨士昭雄
発行者 明治書院
代表 三樹彰
印刷所 大文堂
代表 梶原忠幸
0393-24801-8305
高陽堂製本

発行所 株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町一の十六
電話 二九四—五三三六
振替 東京四九九一

©一九七四 麻生磯次

凡例

一　本書は上段に原文を翻刻し、下段にその対訳文を収載した。

一　本文の作成にあたっては、最も信頼できる初板本を底本に選び、さらに諸本を参照して、可能な限り原文を忠実に翻刻するように努めた。挿絵はそのすべてを本文該当箇所に収めた。ただし、行移り・丁移りは原文によらず、なお適宜段落を設けた。会話に相当する部分に「　」印をつけた。

一　句読点　原文では黒丸点・と白丸点。が混用されていて、その位置も必ずしも厳密なものではないので、諸注を勘案して新たに句読点をつけた。

一　漢字の翻字は、次のような方針によった。

1　正字体　原文の正字体はそのまま正字とした。ただし一般に通用されていない正字体の活字はこれを避けた。

（例）閒→間　疊→畳

2　略字体　原文の略字体の内、現在も行われているものはそのままとした。これらの中には俗字・通用字等があり複雑であるが、しばらく略字として扱う。（例）塩、釈、条、声、体、才、仏、宝、万、礼

ただし、右と同じ字でも正字を用いてある所や、正字の行草体とまぎらわしい略字は、正字に翻字することにした。（例）栄、覚、勧、観、帰、国、歯、断、変、来、恋

3　異体字　読みやすさを考慮して、次のように正字体に改めた。これらの中には古字・同字・俗字・国字などがあるが、しばらく異体字として扱う。（例）壵→喜、筭→算、敉→數、寂→最、秋→杉、邊→邊、役→役

ただし、当時慣用のもので正字に直すにははばかれるような異体字や、特定の正字に直されないような同字は、特に残すことにした。（例）菴、礒、哥、貞、躰、椙、薗、泪、寐、桧、娌

4　当て字　当時慣用のものはなるべく残すことにした。（例）社（こそ）、迚（とて）も、計（ばかり）、風與（かぜと）

5　誤字・誤刻　明らかな誤字・誤刻や、固有名詞の誤字と思われるものは改めた。（例）右（いにしへ）→古（いにしへ）、筑地→築地

なお次のように、誤字であっても当時広く慣用されたものは、残すべきではあるが、読みやすさを考慮して、ここでは正字に改めた。（例）勒→勤、孖→州

6　漢字につけられた濁点は、訓みを示すものとして妥当な振り仮名に改めた。（例）共（ども）→共、嬉し悲し→嬉し悲（がな）し

7　反覆記号は原則として原文のままとしたが、「〻」は通行の「々」とした。漢字の一字または二字分の語の反覆記号「〳〵」は、それぞれ「々」または「々々」とした。（例）國〳〵→國々、是非〳〵→是非々々

ただし、「申〳〵」は「申々」とせず、原文のままにした。

一　仮名づかい　原則として原文どおりとした。ただし、衍字や明らかな誤りはこれを正した。

一　振り仮名　原則として原文どおりにした。ただし衍字や明らかに誤りと思われるものは改めた。また、本来は本文中にあるべき活用語尾や助詞が、振り仮名中に含まれている場合は、原文のままとした。（例）取（とる）、神田橋（かんだばしに）たてる

一　清濁　本文および振り仮名の清濁表記には誤脱が多いので、新たに削補をおこなった。（例）いへとも→いへども、書へし→書べし、只（たゞ）→只（たゞ）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一　半濁点　本文および振り仮名の半濁点の表記を欠くものにはこれを施し、半濁音表記をすべき箇所に濁点のつけられているのはこれを改めた。（例）さつはり→さつぱり、ぽんと町→ぽんと町、干瓢→干瓢

一　特殊な略体および合字、連字体は現行の字体に改めた。（例）ゟ→より、ゟ〜→参らせ候

一　語注　本文読解の便宜をはかって、各章の終りに語釈を注記した。

一　付録　西鶴の読解鑑賞の一助として、巻末に「西鶴小伝」「好色一代男解説」「西鶴略年譜」「付図」を収めた。本巻は本全集の第一巻であるので、西鶴の全貌を伝える意図で、特に「西鶴小伝」「西鶴略年譜」を収載した。「付図」は、「好色一代男」に関係の深いものを選んだが、紙幅に限度があり、本全集の他の巻々の「付図」もあわせて参照してほしい。

目次

凡例

好色一代男

巻一……一
巻二……三
巻三……六
巻四……九
巻五……一三
巻六……一五
巻七……一八
巻八……二九

西鶴小伝……二四

好色一代男解説……二五六
西鶴略年譜……二六一
付　図……二六五

入繪

好色一代男

一

好色一代男　巻一目錄

七歳　けした所が戀はじめ[一]
こしもとに心[二]ある事
はづかしながら文言葉
八歳　おもひは山崎の事
人には見せぬところ
九歳　ぎやうずいよりぬ[三]れの事
袖の時雨はかゝるが幸
十歳　はや念者[四]ぐるひの事
たづねてきくほどちぎり
十一歳　伏見[五]しもくまちの事
十二歳　ばん[六]のうの垢かき
兵庫風呂屋者の事
十三歳　わかれは當座[八]ばらひ
八坂茶屋者[九]の事

一　手燭の火を消したことが、世之介の色道の始まり。

二　恋慕の情のあること。

三　濡れは恋慕。行水の縁語。

四　男色関係で、年長者を兄分とし、これを念者という。

五　撞木町。伏見の遊廓。

六　「煩悩の垢」という謎に、垢かきをかけた。

七　兵庫は港町で、旅人・船頭相手に、風呂屋の湯女が多く、繁昌した。

八　現金払い。

九　茶屋の茶汲み女。湯女と同じく私娼で、八坂・祇園・清水辺に多かった。

けした所が戀のはじまり

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山。爰に但馬の國かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに寐ても覺ても夢介とかえ名よばれて、名古や三左・加賀の八などゝ、七つ紋のひしにくみして身は酒にひたし、一条通り夜更て戻り橋、或時は若衆出立ト姿をかえて墨染の長袖、又はたて髪かづら、化物が通るとは誠に是ぞかし。それも彦七が貞して、願くは咀ころされてもと通へば、なを見捨難くて、其比名高き中にもかづらき・かほる・三夕思ひ〳〵に身請して、嵯峨に引込、或は東山の片陰、又は藤の森ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹よりむまれて世之介と

消したところが恋のはじまり

桜の花もいつの間にか散って、嘆きの種となり、月の美しさも限りがあって、山の端にかくれてしまう。ただ色恋の道だけは尽きることがない。ここに但馬の国の銀を掘る里のほとりに生まれ、京に出て世渡りの家業をおろそかにし、女色男色の二道をかけて、寝ても覚めてもその事を忘れない男があった。替名を夢介と呼ばれ、名古屋三左や加賀の八などとともに、菱の七つ紋をつけて、それを目じるしに仲間を作り、いつも酒に入りびたっていた。夜ふけて一条通りから戻橋の辺を通る姿を見るに、ある時は若衆姿をしているかと思うと、姿を変えて墨染の出家姿になっていることもあり、または立髪鬘をかぶって男伊達になっていることもある。この辺は昔から物騒な所だといわれているが、これこそ化物が通るというものである。それでも鬼を背負った大森彦七のよう

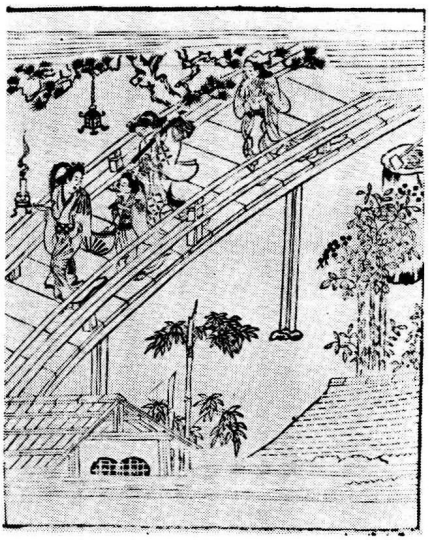
试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

名によぶ。あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし。

ふたりの寵愛、てうち〳〵、髪振のあたまも定り、四つの年の霜月は髪置、はかま着の春も過て、疱瘡の神いのれば跡なく、六の年へて、明れば七歳の夏の夜の寝覚の枕をのけ、かけがねの響あくびの音のみ。おつぎの間に宿直せし女さし心得て、手燭ともして遙なる廊下を轟かし、ひがし北の家陰に南天の下葉しげりて、敷松葉に御しともれ行て、お手水のぬれ縁ひしぎ竹のあらけなきに、かな釘のかしらも御こゝろもとなく、ひかりなを見せまいらすれば、「其火けして近くへ」と仰られける。「御あしもと大事がりてかく奉るを、いかにして闇がりなしては」と、御言葉をかへし申せば、うちうなづかせ給ひ、「懸は闇といふ事をしらずや」と仰られける程に、御まもりわきざし持たる女息ふき懸て、御のぞみになしたてまつれば、左のふり袖を引たまひて、「乳母はいぬか」と仰らるゝこそおかし。是をたとへて、あまの浮橋のもと、まだ本の事もさだまらずして、はや御こゝろざしは通ひ侍ると、つゝまず奥さまに申て御よろこびのはじめ成べし。

に、人になんといわれても平気な顔をして、女郎に取り殺されても本望だと島原に通いつづけていた。そうしているうちに、いっそう見捨てがたい思いがつのって、そのころ評判の高かった遊女の中から、葛城・薫・三夕をそれぞれ身請けすることになった。そしてあるいは嵯峨に、あるいは東山の片陰に、または藤の森にこっそり住まわせて契りを重ねていた。すると、この三人の女のひとりの腹から子供が生まれて、世之介と名を付けた。一々詳しく書くまでもあるまい、御存じの方はよく御存じのはずである。

両親の寵愛はいうまでもない、「ちょうち〳〵、あわわ、かんぶりかんぶり」とあやされ、頭もだんだんしっかりと据ってきて、四つの年の霜月には髪置の祝いをし、五つの春には袴着の式を済ました。疱瘡の神に祈ったおかげで、それも軽くすんで痕も残らず、六つの年を無事に過ごして、明くれば七つの夏の夜の事であった。世之介はふと目を覚まして枕を押しのけ、戸の掛金をはずして、欠伸をしていた。御次の間に宿直していた侍女が、お小用だろうと心得て、手燭をともしてお供をし、長い廊下を渡って、東北の家陰に南天の下葉が繁り、敷松葉のしてある辺に小用をさせた。お手水をなされる濡縁には、拉ぎ割った竹が荒く張ってあるので、もしや金釘の頭が出ていてはあぶないと思って、手燭をさしよせると、世之介は、「その火を消して、もっとそばへおいで」といった。「お足もとが心配で、こういたしますのに、くらがりにしてどういたしましょう」と、お言葉を返すと、世之介は



次第に事つのり、日を追つて假にも姿繪のおかしきをあつめ、おほくは文車もみぐるしう、「此菊の間へは我よばざるものまいるな」などゝ、かたく關すえらるゝこそこゝろにくし。或時はおり居をあそばし、「比翼の鳥のかたちは是ぞ」と給はりける。花つくりて梢にとりつけ、「連理は是我にとらする」と、よろづにつけて此事をのみ忘れず。ふどしも人を賴まず、帶も手づから前にむすびてうしろにまはし、身にへうぶきやう袖に燒かけ、いたづらなるよせい、おとなもはづかしく、女のこゝろをうごかさせ、同じ友どちとまじはる事も、烏賊のぼせし空けした所が戀のはじまり

うなずかれて、「恋は闇ということ知らないのか」といわれたので、御守脇差を持ってお供をした侍女が、息を吹きかけて、お望みどおりに消してあげると、その女の左の振袖を引いて、「そこらに乳母はいないか」といって、気を配るのもおかしかった。たとえてみれば、天の浮橋の話と同じようなもので、まだ男女の関係がどういうものか御存じないうちから、もうそのきざしだけは動いておりますと、ありのままに奥様に申し上げた。母親もこれがお喜びのはじめであろう。

それからだんだんそういう心が日増しにつのっていって、かりそめの遊びごとにも、美人絵のおかしげなものばかり集めた。「多くて見苦しからぬは、文車のふみ」と「徒然草」にも書いてあるが、それも多過ぎては見苦しくもなり、「この菊の間へは私の呼ばない者は来てはいけない」などと、堅く出入りをとめたのも、心憎いことであった。ある時は折紙遊びをなされて、「比翼の鳥の形はこれだ」といって下さった。また花の形を造って梢に取りつけ、「連理の枝というのはこれだ。お前にくれてやろう」というように、何事につけても色恋の事だけは忘れない。犢尾褌のかき初めにも人手を借りず、帶も自分で前結びにしてうしろへ回し、兵部卿の香を着物にたきしめて、その気どった風情は大人も恥ずかしいほどで、女の心を動かした。同じ年ごろの友だちと遊ぶのにも、紙鳶をあげた空などは見ないで、「雲に梯」というが、昔は天にも流星人がいたのだろうか。一年にたった一度逢う星だのに、

を[三四]も見ず、「雲に懸はしとはむかし天へも流星[三五]人ありや。一[三六]年に一夜のほし、雨ふりてあはぬ時のこゝろは」と、遠き所までを悲しみ、こゝろと戀に責られ、五十四歳までたはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人、手日記にする。井筒[四〇]によりてうないこより已來、腎水をかえほして、さても命はある物か。

戯れし

雨が降って逢えない時の気持はどんなであろう」などと、遠い天界のことまでも、恋の悲しい思いで眺めるのであった。我と我が心から恋に責められて、五十四歳までに戯れた女は三千七百四十二人、男色の相手は七百二十五人であった。それは自分で書いた覚え書によってわかるのである。井筒に倚りかかって、まね事みたいな色事をした子供の時から、せっせと腎水を替え乾して、投節の文句ではないが、今日までよくも命がつづいたものである。

（巻一の一）

一　花月の遊興には限度がある。しかし色欲の遊びには限りがないの意。　二　兵庫県の歌枕。「いる」は掛詞。　三　兵庫県朝来郡生野町の生野銀山か。　四　渡世の家業をおろそかにして。　五　男色と女色の二つ。　六　夢中になって遊興する男の名。　七　替名。あだ名。　八　名古屋三左衛門。不破萬作とともに美貌で有名。慶長九年五月、同輩と争って死す。　九　八（やつ）は八左衛門・八郎兵衛などの替名。加賀の伊達男。　一〇　背、両袖の前後、両襟の七箇所に付けた菱型紋。仲間の標識にした。　一一　一条堀川の橋。この橋上で渡辺綱が鬼の腕を斬ったという。戻り橋・化物（変化）・彦七は縁語（類船集）。　一二　前髪を伸ばした若衆姿。　一三　月代（さかやき）を伸ばした髪型。遊客が好んだ。　一四　物事に動ぜぬ貌。大森彦七は建武三年細川定禅に従って、楠木正成と戦い、これを自刃せしめた。その後ある山陰で美人にあい、それを背負って行くうちに、女は鬼になったが、平気な顔をしてそのまま歩いて行った。鬼は正成の霊に頓まれて、彦七の剣を奪おうとしたのである（太平記による）。　一五　島原遊廓が六条三筋町にあった時の太夫。　一六　伏見区藤ノ森。　一七　てうち（手打）てうちとあやして、乳児に手を打ち合わせる遊び。　一八　かぶりかぶりといって乳児の頭を左右に振らせる。　一九　幼児の髪をはやし、十一月十五日に祝う行事。元禄ごろより三歳に決まる。　二〇　男子五歳の年、正月吉日に袴の着初めをする行事。　二一　疱瘡の神は、住吉大神、祇園牛頭天王、西宮百太夫など。　二二　東北の隅、鬼門の方角に火災予防のために南天（難転）を植える。　二三　庭木の保護や猫よけなどのために庭に敷いた松葉。　二四　竹を割って平たく並べたもの。　二五　恋は人を盲目にする慈の譬。ここは恋は闇が都合がよい意。　二六　イザナギ・イザナミ両神が鶺鴒（せきれい）の様を見て男女交合の道を知った故事。　二七　折据。折紙細工。　二八　雌雄一体で、翼・足・目が一組しかない想像の鳥。男女の契深きに譬える。　二九　連理の枝。一根から雌雄二幹を生じ、木理の通じて連なるもの。夫婦の契深きに譬える。　三〇　男子七歳で褌のかきはじめをする。多く桃色の褌を用いた。　三一　兵部卿。合香の銘。数種の香を調合したもの。　三二　余情。風情。　三三　紙鳶。　三四　及ばぬ恋の譬。　三五　夜這い人。流星はよばひほしといわれた（和名抄）。　三六　牽牛織女の二星。　三七　我と我が心から。　三八　六十歳とあるべきところ。　三九　在原業平は三千七百三十余人の女と戯れたという俗説（御伽草子・いそさき等）による。　四〇　「井筒によりてうなゐ子の、友だち語らひて互に影を水鏡」（謡曲、井筒）による。原典は伊勢物語。　四一　精液。　四二　「歓きながらも月日を送る、さても命はあるものか」（新町当世なげぶし）。

はづかしながら文言葉

一文月七日の日、一とせの埃に埋しかなあんどん・油さし・机・硯石を洗ひ流し、すみわたりたる瀬々も芥川となしぬ。北は金竜寺の入相のかね、八才の宮の御歌もおもひ出され、世之介もはや小學に入べき年なればとて、折ふし山崎の姨のもとに遣し置けるこそ幸、むかし宗鑑法師の一夜庵の跡として、住つゞけたる人の瀧本流をよくあそばしける程に、師弟のけいやくさせて遣しけるに、手本紙さゝげて、「はゞかりながら文章をこのまん」と申せば、指南坊おどろきて、「さはいへ、いかゞ書べし」とあれば、「今更馴々しく御入候へ共、たへかねて申まいらせ候。大形目つきにても御合點有べし。二三日跡に姨様の昼寝をなされた時、こなたの糸まきをあるともしらず踏わりました。すこしもくるしう御ざらぬと、御はらの立さうなる事を腹御立候はぬは、定而おれにし

恥ずかしながら文言葉

七月七日の七夕には、一年中の埃にまみれた金行燈・油さし・机・硯などを洗い清めるので、ふだんは澄んでいる瀬々の水も、ごみだらけの芥川になってしまうのである。淀の支流に芥川という川があるが、その北の方に金竜寺があって、入相の鐘がひびいて来る。それを聞くにつけても、後醍醐天皇の皇子恒良親王が八歳の時に詠まれたという、「つくづくと思ひくらして入相の鐘を聞くにも君ぞ恋しき」の御歌が思い出される。世之介ももう八つになり、小学にあがる年になった。そのころ山崎の叔母のもとに預けられていたのを幸い、むかし宗鑑法師が住んだ一夜庵の跡をついで住み続けている人が、滝本流の書をよくしたので、そこへ弟子入りさせることになった。ところがある日世之介は、手本を書いてもらう料紙を師匠の前へ差し出して、「まことに申し兼ねますが、これに手紙を書いていただきとうございます」といったので、師匠の坊さんは驚いて、それでも、どう書いたらいいのだというと、世之介は早速手紙の文句をしゃべり出した。「今さら馴れ馴れしく、失礼には存じ候えども、堪えかねて申しまいらせ

のふでいゝたい事が御座るか。御座るならば聞まいらせ候べし」と永々と申程に、師匠もあきれはてゝ、是迄はわざと書つゞけて「もはや鳥の子もない」と申されければ、「然らばなを〳〵書を」とのぞみける。「又重而たよりも有べし。先是にてやりやれ」と大形の事ならねばわらはれもせず。外にいろはを書て是をならはせける。

夕陽端山に影くらく、むかひの人來りて里にかへれば、穐の初風はげしく、しめ木にあらそひ、衣うつ槌の音物かしましう、はしたの女まじりに絹ばり、しいしを放して、「戀の染候。大方私の目つきにても御合点あるべし。二三日前に、叔母様が昼寝をなされた時、あなたの糸巻を、そこにあるとも知らず、踏みわりました。ところがあなたは少しも苦しゅうござらぬと、お腹の立ちそうな事をお腹立て候わぬは、定めし私に忍びて言いたいことがござるか。ござるならば、聞きまいらせ候べし」と、長々というので、師匠もあきれ果てて、そこまではわざと言うまに書き続けたが、「もう鳥の子もない」といわれると、「それではあとは尚々書にして、書き入れて下さい」と所望した。「また改めて便りをすることもあろう。今日はまずこれだけにしてやりなさい」といって、変わった手紙の文句だけに、笑われもせず、ほかにいろはの手本を書いて、手習いをさせた。

夕日が山の端に入り、あたりが薄暗くなった時分、迎えの人が来て世之介をつれ帰った。秋の初風が烈しく吹いて、油搾木のきしむ音と衣を打つ砧の音とが入り乱れて、騒々しく聞こえた。叔母の家では、女中たちが一緒に、絹張りの簱をはずしていたが、ひとりが、「この美しい恋の染衣は、お嬢様のふだん着ですが、このなでしこの腰模様のある、くちなし色のお召物は、どなたのでしょう」と尋ねると、他のひとりが、「それは世之介様のお寝間着」と答えた。居合わせた一年契約の下女が、そこそこにそれを畳みながら、「それならば、京の水で洗わなけりゃ」と、大声にいっているのを、世之介が聞きつけて、「垢じみたのを、お前たちの手で洗わせるのも気の毒だが、旅は人の情ということがあるか

ぎぬ、是は御りやうにん様の不断着、此なでしこの腰形くちなし色のぬしや誰」とたづねけるに、「それは世之介のお寝巻」と答ふ。一季おりの女そこ〳〵にたゝみ懸、「さもあらば京の水であらはいで」とのゝしるを聞て、「あか馴しを手に懸さすも、たびは人の情といふ事あり」と申されければ、下女面目なくかへすべき言葉もなく、只「御ゆるし」と申捨て逃入袖をひかえて、「此文ひそかにおさか殿かたへ」と頼まれけるほどに、何心もなふたてまつれば、娘更に覺もなく赤面して、「いかなる御方よりとりてつかはしける」と言葉あらけなきをしづめて後、母親かの玉章を見れば、隠れもなくかの御出家の筆とはしれて、しどもなく、さはありながらと、罪なき事に疑はれて、その事こまかに云わけもなをおかしく、よしなき事に人の口とてあらざらむ沙汰し侍る。

世之介姨にむかつてこゝろの程を申せば、何ともなく今まではおもひしに、あすは妹のもとへ申遣し、京でも大笑ひせさせんと、おもふ外へはあらはせず、我が娘ながら貌も世の人並とて、去方に申合てつかはし侍る。年だに大形ならば世

ら」といったので、下女は面目を失い、返す言葉もなくて、「お許し下さい」といい捨てて、逃げ込もうとした。世之介はその袖をおさえて、「この手紙をおさか殿のところへこっそり渡してくれ」と頼まれたので、下女は何の気もなく、いわれた通りにそれを取り次ぐと、娘の方では、いっこうに覚えのないことなので、顔を赤らめて、「どういうお方から頼まれてよこしたのか」と、言葉も荒々しくいうのを、やっとなだめて、母親がその手紙を取って見ると、紛れもなく、かの師の坊の筆蹟だということがわかった。子供じみた、たどたどしい文句ではあるが、もしかするとそうかも知れないと、罪もないのに疑いをかけられた。師の坊は、それについて事細かにいいわけしたいのだが、それもいっそうおかしいので、ぐずぐずしているうちに、つまらないことに口のうるさい世間のことだから、いつの間にかとんでもない噂を立てられてしまった。

世之介は叔母に向かって、おさか殿を思っているのは私だと、心中をうちあけていうと、今までは子供だとばかり思っていたのに、さてはそういう心があったのか。明日は早速この事を妹のところへ知らせて、京でも大笑いをさせてやろうと心の中では思ったものの、顔色にも現さず、我が娘ながら顔かたちも十人並だから、さる所に話をきめて縁づくことになっている。年さえどうやら釣り合えば、世之介の嫁にしてやってもよいのだがと、自分

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com